

地域の底力——山形

山形県山形市・天童市

# 地場産業の伝統技術を集積した 匠の集団・「山形工房」を訪ねて

高い技術を持ちながら、それを製品開発に生かせず、市場を縮小させている例は日本全国にあふれている。山形県では地元出身の世界的工業デザイナー奥山清行氏を中心に、地場産業の力を集結した工房方式による製品開発を目指す「山形カロッツェリア研究会」を設立。参加企業のうち五社による「山形工房」のブランドでヨーロッパの展示会に出展し、高い評価を得た。山形に伝統工芸の匠たちを訪ねた。



山形鑄物の特徴は、繊細な表情を持つ「薄造り」にある。一見どっしりとした風情を見せながら驚くほど軽い和銃の茶釜。まるやかなお湯と松風の響きが茶人を魅了してきた。数百年の使用に耐え得る強さも合わせ持つ。



## 伝統工芸の町・山形

秋の深まった山形路は、収穫の美しさに満ちていた。山形新幹線の車窓から眺める吾妻連峰は赤く色付き始めている。米沢から山形に至る平野部では、刈り取りの終わった稲が掛け干しされ、柿やリンゴがたわわに実って、柔らかな日差しの中で輝いている。山形が日本有数の「モノ生り」の豊かな土地であるこ

とが実感される光景だった。

一方で、夏は暑く冬は雪に閉ざされる土地柄でもあり、人々の気質は篤実で我慢強く、こつこつと時間をかけてモノづくりをする文化が自然に蓄積されている。思いつくままにざっと数え上げてみても、山形鑄物、木工、米沢織、酒田船簞笥、和ろうそく、山形絨毯……と次々に工芸品の名が挙がる。

このような分厚い文化と技術を継承しながら、山形は日本の地方社会共通の問題を抱えてきた。ライフスタイルの変化と人口減少に伴う市場の縮小である。どれほど優れた製品を作っても市場の拡大が見込めなければ、人材の育成や雇用がままならない。だが、一業種、あるいは一社だけで危機的状況を打破しようとしても、なかなか力及ばないのが現実だった。

それを変える機会は、人々とのつながりがもたらした。世界的工業デザイナーの奥山清行氏と、山形鑄物の菊地保寿堂十五代目当主・菊地規泰氏は小学校・中学校・大学（武蔵野美術

大学）の同級生。ふるさとを愛する心はお互い引けを取らず、また山形の将来を憂える気持ちも強かった。二人は顔を合わせるとともに、日本のモノづくりや山形の工芸の将来について議論してきた。その成果として生まれたのが、山形から世界に新しいブランドを発信しようという「山形カロツェリア研究会」であり、伝統工芸の技術を持つ参加企業のうち五社が実際に製品を開発する「山形工房」のプロジェクトであった。

## きちんとした「日本の道具」を世界に

プロジェクトの中心となった一人、菊地氏の話を聞くために山形市鑄物町にある菊地保寿堂の工房を訪ねた。鑄物町には一五社ほどの鑄物製造企業が集結。工房というイメージを覆すような大きな建物が並び、まさに「町」を形成していた。

山形鑄物の歴史は平安時代にさかのぼり、菊地家も古くから鑄物を手掛けてきたと思われる

が、文献に残っているものだけで厳密に判断し「菊地家は最上家お抱えの鑄物師・釜師として十五代を数える」と言い伝えている。

菊地氏は言う。

「うちでは江戸時代から『和銃（わずく）』という非常に質のよい鉄を使って、現在では茶釜を年間二〇個ほど限定して作っています。普通は鉄鉱石を使った釜ですけれども、和銃の原材料は砂鉄。それを精錬し直して三昼夜かけて溶かします。その最初に出てくるものが和銃なんです。和銃の中にも七種類があつて、一番良いのが真砂。次が赤目です。」

今では重要文化財になっている室町時代の芦屋釜は、真砂を主材料としています。芦屋釜は非常に肉が薄いものですが、和銃を薄くするのは大変むずかしいのです」

戦時中、菊地保寿堂は釜などの代わりに手りゅう弾を作る工場に指定されていた。全国の鑄物師は皆、材料を供出させられて仕事ができなかった時代であ

る。菊地保寿堂は手りゆう弾を作る代わりに年間三〇個だけ鉄瓶を作ることを許された。

だが、非常に茶釜などとてもないと、和銃を使った独自の釜作りはあきらめなくてはならなかった。

「たった二年の間に技術が廃れてしまったんです。戦後、私の伯父の長野埴志が技術を復興して人間国宝の第一号となりました。伯父は工房を持っていなかったので、私の祖父の十三代、父の十四代と一緒にうちで復興に取り組んだため、和銃の技術は今うちにあります」

二年で廃れたものが確実に復興できたといえるまでには一五年余りの時を必要とした。失われるのは早く、とり戻すには長い時間がかかる。鑄物に限らず伝統技術における真実である。

菊地さんも茶道を楽しみながら、各流派の注文で和銃の茶釜を作り続けている。仕事に役立てようと古い文献に学び、名品と呼ばれる茶釜や他の茶道具も研究してきた。

「昔の職人のすごさ、仕事に取

菊地保寿堂は、出羽国山形藩主・最上義光公が鑄物師たちを銅町に移した頃、慶長九（一六〇四）年、初代・喜平治から始まると伝えられる老舗（下）。菊地保寿堂第十五代当主・菊地規泰氏。和銃をはじめとする伝統技術を守り伝える一方、時代に合った創作にも挑戦するのが暖簾を継いだ者の使命だと語る（左）。



り組む真摯さを感じます。例えば茶釜一つ取っても今とは違うんです。蓋を取ったときの口作りにしても、道具として人に使われることをわきまえていた。それがいつの間にか職人が「芸術家」になってしまつて……。昔の職人は自分の領分をきちつとわかつた上で名品を残したのですが。茶道具のことは『茶器』と言いますよね？ あくまでも器なんです。そこにちゃんと答えがある。

奥山君と話をしていたときも、『やっぱり芸術品ではなくて、き

ちんとした日本の道具を作らなくてはいけない』と意見が一致しました」

職人が「芸術家」を自称し始めたとき、墮落が生まれる。自意識が仕事の邪魔をするのである。本来の目的をわきまえないオブジェのような「芸術品」に、菊地氏も奥山氏も強い疑問を抱いていた。

職人として自分を厳しく律した上で、磨かれ継承されていく技術。それを土台にして生まれるものだけが、世界に通じるのではないか。

## 山形を新しい工房の集積地にしたい

フェラーリのスーパーカーのデザインで知られる奥山氏は、以前からイタリアのブランドの手法に強い関心を抱いていた。グッチやプラダはもともとイタリアの中小企業で、量産化をしない工房方式を貫く企業である。フェラーリのスーパーカーも、優れた職人技を駆使して工房で製造される。なぜイタリアにこのような「カロッツェリア」（イ



タリア語で車のボディ（工房の意）と呼ばれる工房が多数集まり、世界的ブランドを構築しているのだろうか。

菊地保寿堂は以前、ヨーロッパの展示会に出展したことがある。だがこのときは失敗に終わった。

「失敗するのも当然で、相手のライフスタイルなどを考慮することもなく、日本で作っている

ものをそのまま持って行っただけですから（笑）。

一九九四年か九五年でしたか、フランクフルト・メッセに出展したときに現地へ行ったんですが、ちょうど奥山君はボルシェデザインにいて、シュツットガルトからフランクフルトまでわざわざ会いに来てくれました。そのころから将来一緒に何かやりたいね、という話をしていたんです」

その後二〇〇一年に、山形市内の公衆街路灯を山形の地場産業の力を結集して作るという市長肝いりの事業があった。せっかく鋳物をはじめとする材料関係の企業があるのだから、それを生かそうというアイデアである。奥山氏がデザインアドバイザーの任に当たり、山形域内で九八社二一業種が連携してプロジェクトを成功させた。

「山形にある技術を、量産化に使うのではなく工房形式で生かしていく。そうすれば何かが生まれるんじゃないか。そこで奥山君が提唱したのが『山形カロツツェリア研究会』でした」

蓄積されてきた山形の技術をカロツツェリア方式で集合し、世界的ヒットに結びつけて、山形の地場産業をもう一度発展させていこう。そういう志を持った呼び掛けに対して賛同した企業と二〇〇三年に「山形カロツツェリア研究会」を設立。代表には奥山氏自身が就いた。

「奥山君もブランドの体現者として仕事をしてきたわけです。なぜフェラーリが成功しているのかとか、外国から見た日本のブランド性の足りなさ、どういうスキームを組めばブランド化に結び付くのかなど議論するのに一年ほどかけました。そして三年で結果を出したいと目標を立てました。そのためにも世界で最も高いステージであるインターアの国際見本市『メゾン・エ・オブジェ』で発表し、海外で評価が得られれば、それが日



山形鋳物は、一〇六〇年頃、山形市内を流れる馬見ヶ崎川で鋳物に適した良質の砂が発見されたのが起源とされる。その製法は、まず砂で型を作り、型の空洞の中に溶かした鉄を流し込み、凝固したら鋳物を割り出し、細かい部分の穴開けなどの成形加工や、珪藻の焼き付けなど職人の手業が幾重にも施されていくというもの。さまざまな工程を経てようやく出来上がる。



山形工房のポット「繭」。一献を注いだときの切れ味を重んじた武士に応えるために完成度を高めた注ぎ口など、シンプルなフォルムの随所に職人が培ってきた技が光る。

本に伝わって国内の評価も必ず上がる——『黒船効果』と呼んでいます。——、それによって山形の産業を復興させようという戦略です」

奥山氏は何度も山形に戻り、打ち合わせを重ねた。また製造の現場を回って、職人たちの会話も積み重ねた。メールも駆使した。目標の三年が過ぎようとする二〇〇六年一月、パリで

開催された「メゾン・エ・オブジェ」に、シンプルながらスタイリッシュな「山形工房」のブースが出展された。

「山形工房」に参加したのは菊地保寿堂、山本製作所（共に鋳物）、天童木工、多田木工製作所（共に木工）、オリエンタルカーベット（山形絨毯）の五社である。それぞれの技術を生かし、ヨーロッパ向けの斬新なデザインと高い機能を持った作品にはバイヤーたちの注目が集まった。菊地保寿堂は奥山氏がデザインした鉄製ポットの「繭」「ふく」を出展した。繭のような丸みを持ちつつ、刀剣をイメージした少し大きめのつるが印象的な「繭」、楕円形でこれまでの鉄瓶のイメージを打破する「ふく」。どちらも石灰分の多いヨーロッパの水に対応できるよう、中に珪瑯（けいろう）を引いてある。

奥山氏のデザインを形にするため、職人たちがさまざまな工夫を凝らして生まれた「繭」「ふく」はパリの高級レストランやカフェなどから注文が入り、人気を集めた。それが日本にも逆

流し、鉄瓶を使ったことのない世代にも受け入れられ始めている。まさに狙った通りの「黒船効果」が生まれているのだ。

## デザイナーに鍛えられた 天童木工の技術

鋳物の二社のほか、目を引くのは木工の二社が参加していることだろう。特に天童市の天童木工は特殊な成形合板技術を売り物に、日本国内の官庁や公共機関、有名企業、ホテルや旅館などにたくさんのお家具を納入する県内の有名企業である。

もう一つ、天童木工の名が知られた理由として挙げられるのは、日本を代表する建築家や工業デザイナーと多くのコラボレーションを経験し、工業デザイナーの歴史に残る名品を次々に生んできたことだろう。

柳宗理、剣持勇、磯崎新らの厳しい注文に応え、製品化してきた高い技術力に奥山氏も注目。「山形工房」としては折り紙をイメージさせるフォルムを持った



2008年1月にパリで開催された世界最大級のインテリア見本市「メゾン・エ・オブジェ」。7万人を超えるバイヤーやマスコミが集まる。「山形工房」は5品目の新製品を含む20品目を出展。今年も高い評価を得た。写真右側が菊地氏の幼なじみでもある奥山氏（写真提供：株式会社菊地保寿堂）。



奥山氏が、折り紙をモチーフにデザインし、職人が成形合板技術の限界まで挑戦して作り上げた椅子「ORIZURU」と、森の木々をイメージしたコートハンガー「ALBERO」。



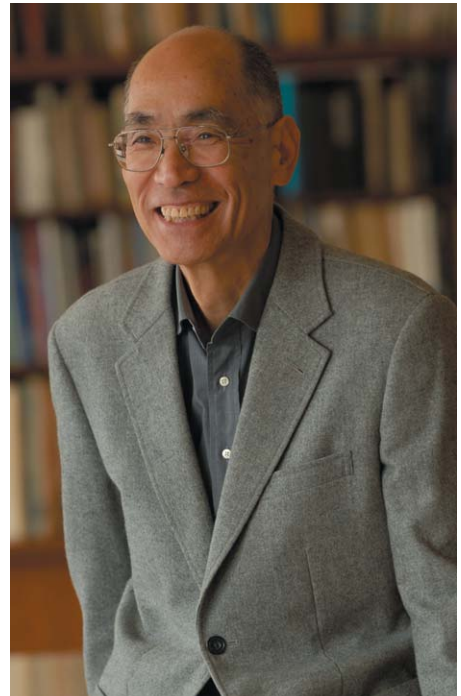
椅子「ORIZURU（折り鶴）」、森の木々をイメージしてデザインされたコートハンガー「ALBERO」を出展した。

「ORIZURU」も「ALBERO」も一目見ただけで、製

造に高度な技術が必要なことがわかる。天童木工の技術を信頼したからこそ、奥山氏は安心してスケッチを描いたのだろうと思った。

天童木工に長く勤務し、デザイナーたちの難しい注文に応え続けてきた菅澤光政氏は、同社の技術についてこう語る。

「通常、デザイナーから話を頂いて完成するまでには二年ぐらいの時間がかかります。一番難しいのは成形合板するものとなる型作りですね。プレス機の型をきちんと作るには設備投資の面で非常にコストも掛かりますので、数が少ないのですと手作業を選ぶこともあります。実



天童木工の「柳番」（柳宗理氏担当の意）と呼ばれた元開発部長の菅澤光政氏。家具における新分野の開発と水準向上に寄与した功績により、1996年、第25回国井喜太郎産業工芸賞受賞。2005年に退社した現在は、東北芸術工科大学非常勤講師を務める。

際に製品になる部分にシワが出ず、裂けがないようにしていく品質の収斂<sup>しゅうれん</sup>も重要です。プレスをかけたときに思い通りの仕上がりにならないときは別の工夫をしなくてはなりません。

また、木はどうしても狂いが出ますから、それが出来ないように木目の方向をうまく組み合わせていきます。縦を何枚、横を何枚にすればいいか、何度も組み合わせを変えながら考えていく。だから時間がかかるんです」天童木工の成形合板技術とは、何枚ものの板を接着剤で貼り、型でプレスし、電流を通して熱を加えていくもの。熱を加えるのは接着剤を早く乾かすためであ

る。平たい合板ではなく複雑な形にも対応できる技術として、高い評価を得てきた。

菅澤氏自身、たくさんのデザイナーに鍛えられてきた。柳宗理氏の場合は、作りたいモノのイメージがデザインだけでなく使い心地や質感まではっきりしており、注文も明快。要求は厳しくとも、やりやすいタイプのデザイナーだった。

「一番鍛えられたのは剣持勇さんですね。でも剣持さんも、工場に来れば職人には非常に人当たりがよく、一目置いた姿勢を崩さない方でした」

自分のデザインを具体化してくれるというだけでなく、自分にはない技術を持っている専門家だと考えるからだろう。菅澤氏は剣持氏のオーダーに応じて

山形の木工は数百年続く伝統的な日本家屋の建具がルーツ。天童木工の本社がある天童市も、古くから木工業を営み、将棋の駒の生産では日本一だ。





柳宗理デザイン「バタフライスツール」。極限まで追求した曲線美を実現するため3年にも及ぶ試行錯誤を経て完成。日本を代表する傑作家具として半世紀たった今なお愛用されており、ルーブル美術館やニューヨーク近代美術館などに永久コレクションとして収蔵されている。



剣持勇デザイン「柏戸イス」。「天童木工は難しいデザインでもなんとか実現してくれる」。建築家やデザイナーの間に広まったこの口コミこそが、職人にとって最上級の勲章ではないだろうか。

「柏戸イス」などの名品を世に送り出している。

「柏戸」は山形県出身の大横綱。横綱昇進の祝いに贈られたことからその名が付いた。使用するのはスギ材だが、根元の荒々しい木目を厳選して組み合わせる。厚みのある木材を乾燥させるため長い時間がかかる。菅澤氏は自身の著書『天童木工』の中で次のように書く。

——荒木取りした材料は白太（しらた）。年輪の白い部分で辺材に現れることが多い）と赤太（あかた）。年輪の赤い部分で心材に

現れることが多い）のバランスを見ながら水平方向に集成され、馬蹄形の部材をつくり上げていく。連続する木の断面、木口の木目がデザイン上の重要なポイントとなり、椅子の表情そのものを決定づけることもあって、ここでは職人のセンスも要求される。——

言われたとおりにモノを作り上げるだけでも難しいが、さらに職人自身のセンスも必要となる高度な仕事なのだ。デザイナーが職人を大切にするのも当然である。

## 職人の技術を高めて 山形を発展させる

奥山氏も、山形で毎年一回行われる成果発表会の場で、職人をステージに上げて、自らプレゼンテーションさせるという。モチベーションと責任感の向上に役立て、職人の自尊心を育てるためである。

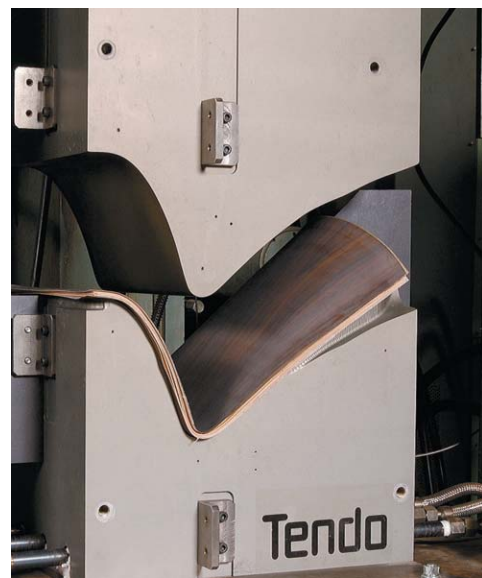
「ORIZURU」「ALBERO」は菅澤さんが育てた後輩の職人たちが作った。デザイン画を見たときは驚いたというが、仕上がったものは最初のデザイン画とほとんど変わっていない。イメージを具現化するために、知恵と技術を結集させるのだ。

「ORIZURU」に座らせてもらったが、予想よりもはるかに座りやすい。背もたれもよくしなっていて、デザインが優れているだけでなく高い機能を持っている。

「モノづくりは地道な仕事。じっくり構えて取り組む山形のよい土地柄が向いていると思うんですよ」

と東京・葛飾出身の菅澤氏は言う。学校で学んだ木工技術を生かし、また冬は好きなスキーもできるという理由で山形に移り住んだが、実際に四〇年働いてみて、ここがモノづくりに適した土地であることを実感している。モノづくりをしたいと考えてのUターン・Iターンも増えているという。

あとは、「山形カロッツェリア研究会」の試みをどこまで発展させていけるかが課題だろう。奥山氏というコンセプターを得たチャレンジ。真摯な「日本の道具」を作り続け、息の長い支持を世界で、そして日本で得られること。それが実現できたとき、奥山氏や菊地氏が目指したプロジェクトの真の成功となる。



わずか1mm程度の薄い板を何枚も重ね、圧力と熱を加えながら曲げていく成形合板技術。天童木工は、著名なデザイナーの高度な要求に応えることで自らの技を極めていった(写真提供：株式会社天童木工)。